

埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊 2

仁科弘之教授退職記念論文集

言語をめぐるx章—言語を考える、言語を教える、言語で考える—

格体制の交替の観点からみた「困う」の意味的特徴

—壁塗り代換や餅くるみ交替を起こさない理由—

川野 靖子

埼玉大学教養学部・人文社会科学研究科

格体制の交替の観点からみた「囲う」の意味的特徴

—壁塗り代換や餅くるみ交替を起こさない理由—

川野 靖子

【キーワード】

場所格交替、locative alternation、位置変化、状態変化

【要旨】

「囲う」という動詞は、総体変化を表すにもかかわらず格体制の交替（壁塗り代換および餅くるみ交替）を起こさない。この点で、一見、交替動詞の条件を記述した川野（2009）の反例のようにもみえる。しかし「囲う」の意味的特徴を丁寧に分析すると、反例ではなく、交替を起こさない理由が川野（2009）の枠組みによって説明できることが分かる。

具体的に述べると、「(～ヲ～デ) 囲う」には「[「ヲ格句の事物（内側）—デ格句の事物（外側）」という位置関係を指定する」という意味的特徴と、「[「デ格句の事物→ヲ格句の事物」という動きの方向を指向する」という意味的特徴があり、これらの意味的特徴が、それぞれ壁塗り代換と餅くるみ交替の成立を妨げると考えられる。よって、壁塗り代換や餅くるみ交替を「位置変化の下位類である依存的転位と、状態変化の下位類である総体変化の間の意味タイプのシフトによって起こる現象」と捉えた川野（2009）の枠組みの中で、「囲う」のふるまいも説明できることになる。

1. はじめに

次の(1)では、「塗る」という動詞が～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形をとり、しかも両文がよく似た意味を表すという現象がみられる。(2)が示すように、「満たす」も同じ現象を起こす。

- (1) a. 壁にペンキを塗る (～ニ～ヲ形)
- b. 壁をペンキで塗る (～ヲ～デ形)
- (2) a. グラスに水を満たす (～ニ～ヲ形)

b. グラスを水で満たす (～ヲ～デ形)

このような格体制の交替現象は、「壁塗り代換」と呼ばれている（奥津 1981 等）。壁塗り代換の形式的特徴を整理して示すと次のようになる。

(3) 壁塗り代換

a.	～ニ (壁に)	～ヲ (ペンキを)	動詞 (塗る)
b.	～ヲ (壁を)	～デ (ペンキで)	動詞 (塗る)

「塗る」や「満たす」のように壁塗り代換を起こす動詞がある一方で、次の「置く」や「ふくらます」のように、こうした交替を起こさない動詞もある。

- (4) a. テーブルにコップを置く (～ニ～ヲ形)
b. *テーブルをコップで置く (～ヲ～デ形)
- (5) a. 風船を空気でふくらます (～ヲ～デ形)
b. *風船に空気をふくらます (～ニ～ヲ形)

つまり、壁塗り代換を起こすのは特定の範囲の動詞に限られるのである。川野 (2009) では、「塗る」「満たす」等の壁塗り代換を起こす動詞（以下、交替動詞と呼ぶ）と「置く」「ふくらます」等の壁塗り代換を起こさない動詞（以下、非交替動詞と呼ぶ）の意味的特徴を比較して交替動詞の条件を記述し、交替が起こる仕組みを明らかにした。

本稿では、壁塗り代換を起こさない「囲う」という動詞に焦点を当てて分析を行う。「囲う」は、一見、川野 (2009) の記述の反例のようにみえるのであるが、実際にはそうではなく、「囲う」が交替を起こさない理由も川野 (2009) の枠組みによって説明できるということを示す¹。

なお、～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の交替現象には、従来から知られている壁塗り代換の他に、壁塗り代換とは交替パターンの異なる「餅くるみ交替」が存在するが（川野 2004、2006、2009）、「囲う」は餅くるみ交替も起こさない。本稿では、その理由も川野 (2009) の枠組みの

¹ 「覆う」「詰める」も、一見、川野 (2009) の反例のようにみえるが実際には川野 (2009) の枠組みで説明することができる。これについては川野 (2013) で論じた。

(6) と (7) から分かるように、同じ～ニ～ヲ形をとる動詞 (=位置変化動詞) の中にも、「塗る」のように交替を起こす動詞もあれば「置く」のように交替を起こさない動詞もある。また、(6) と (8) から分かるように、同じ～ヲ～デ形をとる動詞 (=状態変化動詞) の中にも、「塗る」のように交替を起こす動詞もあれば「ふくらます」のように交替を起こさない動詞もある。これらのことは、「位置変化」や「状態変化」の中に下位類があり、交替動詞が表す位置変化や状態変化のタイプというものが存在する (逆に言えば、そうしたタイプに該当しない位置変化や状態変化を表す動詞は交替を起こさない) ことを示している。交替動詞の条件を明らかにするには、そうしたタイプを特定する必要があるのである。

それでは、交替動詞が表す位置変化や状態変化とは、それぞれどのようなタイプの位置変化、状態変化なのだろうか。

まず位置変化について、川野 (2009) では、「塗る」等の交替動詞と「置く」等の非交替動詞が表す位置変化を比較し、前者の表す位置変化は「依存的転位」であり、後者の表す位置変化は「非依存的転位」であると記述した。「依存的転位」とは、「対象が他の事物に依存的なあり方でそこに位置づけられる」というタイプの位置変化であり、「非依存的転位」は、対象の位置づけられ方が他の事物から制限されないタイプの位置変化である。たとえば「塗る」は、対象 (例: ペンキ) を場所 (例: 壁) の表面の形状に沿って薄く広げていくという動作を表し、位置づけられる際の対象 (ペンキ) の形状が、場所 (壁) の形状に依存して決まる (依存的転位)。これに対し、「置く」が表す位置変化にはこのような指定がなく、位置づけられる対象 (例: コップ) の形状等は場所 (例: テーブル) の形状等から制限されない (非依存的転位)。

次に、状態変化について、川野 (2009) では、「塗る」等の交替動詞が表す状態変化と「ふくらます」等の非交替動詞が表す状態変化を比較し、前者の表す状態変化は「総体変化」であり、後者の表す状態変化は「自体変化」であると記述した。「自体変化」が、対象そのものに生じる変化 (対象の属性の変化) であるのに対し、「総体変化」は「対象が他の事物を伴った状態になる」という変化であり、対象それ自体の変化を含まないものである。たとえば「～ヲ～デふくらます」の場合はヲ格句の対象が必ず大きくなる必要があるのに対し (自体変化)、「～ヲ～デ塗る」の場合はヲ格句の事物の大きさが変わる必要はなく、大きさ以外の属性が変化する必要もない (総体変化)。

以上をまとめると、交替を起こすのは、位置変化動詞の中でも依存

的転位を表す動詞であり、状態変化動詞の中でも総体変化を表す動詞である（非依存的転位や自体変化を表す動詞は交替を起こさない）と考えられる。

2-2 壁塗り代換が起こる仕組み

既に述べたように、同じ「塗る」でも～ニ～ヲ形の「塗る」は依存的転位（位置変化の下位類）を表し、～ヲ～デ形の「塗る」は総体変化（状態変化の下位類）を表すと考えられる。つまり両者は動詞類型が異なると考えられるのであるが、一方で、よく似た意味に感じられることも確かである。よって、～ニ～ヲ形の「塗る」と～ヲ～デ形の「塗る」を単に別の動詞として（つまり同音異義語として）捉えるのは妥当ではないだろう³。動詞類型上は別の類型に属しつつ、しかしどこかのレベルで共有するものがあると考えべきだと考えられる。

このことを踏まえ、川野（2009）では、「依存的転位として解釈される出来事が、見方を変えると総体変化としても解釈でき、かつその逆も成り立つ」という意味タイプのシフトによって壁塗り代換が起こると論じた。「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」を例にとると、現実世界のある出来事を「壁の形状に沿ってペンキが存在するようになる」という依存的転位として類型化したのが前者の文であり、その同じ出来事を「壁がペンキを伴った状態になる」という総体変化として類型化したのが後者の文だ、ということである。

以上の川野（2009）の議論をまとめると、次の（9）のようになる。

（9）川野（2009）のまとめ

位置変化を表す動詞のうち、依存的転位を表す動詞が壁塗り代換を起こす（非依存的転位を表す動詞は交替を起こさない）。また、状態変化を表す動詞のうち、総体変化を表す動詞が壁塗り代換を起こす（自体変化を表す動詞は壁塗り代換を起こさない）。

壁塗り代換は、「依存的転位として解釈される出来事が、見方を変えると総体変化としても解釈でき、かつその逆も成り立つ」という、依存的転位と総体変化の間の意味タイプのシフトにより

³ 英語等の他言語でも似たような動詞が同じ現象を起こすことから（e.g., *smear paint onto the wall / smear the wall with paint*）、同音異義語とは考えにくい。同音異義語と考えた場合、日本語で「塗る」等が壁塗り代換を起こすことと他言語で似たような動詞が同じ現象を起こすことは偶然だということになるが、このようには考えにくいと思われる。詳しくは川野（2016a、2016b）を参照のこと。

生じる現象である。

3. 「囲う」はなぜ壁塗り代換を起こさないのか

では、「囲う」の分析に入りたい。後述するように、「囲う」は総体変化を表すにもかかわらず、壁塗り代換を起こさない。この点で、一見、川野（2009）の反例のようにもみえるのであるが、実際にはそうではなく、「囲う」が交替を起こさないことは川野（2009）の枠組みによって説明できるということを示していく。

なお、『明鏡国語辞典』では「囲う」の意味を、

- ① 内と外を区別する仕切りを設けて、周囲を取り巻く
（土壁で屋敷を囲う）
- ② （ひそかに）妻以外の女性を扶養する（妾を囲う）
- ③ ひそかにかくまう（逃亡者を納屋に囲う）
- ④ かばい守る（お千は宗吉を背後に囲って）
- ⑤ 野菜などを蓄える、貯蔵する（タマネギを囲う）

と記述している。このうち、本稿で取り上げるのは、①の「囲う」である。①の「囲う」を取り上げる理由は、「内と外を区別する仕切りを設けて周囲を取り巻く」という出来事が総体変化に該当するにもかかわらず、壁塗り代換が起こらない、という点による。以下、本稿で「囲う」と言った場合には、①の意味の「囲う」を指すものとする。

『明鏡国語辞典』に「土塀で屋敷を囲う」という例文が上がっていることから分かるように、「囲う」は～ヲ～デ形をとる。また、この「～ヲ～デ囲う」が表す「内と外を区別する仕切りを設けて周囲を取り巻く」という出来事は、状態変化の中でも総体変化であり、自体変化ではない。2-1 で述べたように、自体変化とは対象（ヲ格句の事物）そのものの変化であり、「風船を空気でふくらます」（大きさの変化）のようなものを指す（この他、「海水を水で薄める」（濃度の変化）等もあるだろう）。これに対し、「屋敷を土塀で囲う」は屋敷自体の変化を表すわけではない（「囲う」という動作によって「屋敷」の大きさや形、その他の属性が変わるわけではない）。「囲う」が表す状態変化は「壁をペンキで塗る」「グラスを水で満たす」といった交替動詞が表す状態変化と同様、「ヲ格句の事物がデ格句の事物を伴った状態になる」という種類の変化、すなわち総体変化であると考えられる。

しかし、それにもかかわらず、「囲う」は壁塗り代換を起こさない。以下の（10）が示すように、「～ヲ～デ囲う」を～ニ～ヲ形にすること

はできないのである⁴。

- (10) a. 屋敷を土塀で囲う (～ヲ～デ形)
b.*屋敷に土塀を囲う (～ニ～ヲ形)

念のため、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下 BCCWJ)で「囲う」の使用状況を調査したところ、～ヲ～デ形と判断できる例が 135 例あったのに対し、～ニ～ヲ形と判断できる例は 0 例であった⁵。ここからも「囲う」は壁塗り代換を起こさない(あるいは、起こしにくい)ことが窺える。

それでは、なぜ「囲う」は総体変化を表すにもかかわらず壁塗り代換を起こさないのだろうか。これは、「囲う」が総体変化を表すという点で交替動詞の条件を満たしているものの、一方で、位置変化へのシフトを妨げる意味的特徴も有しているからだと考えられる。

上述のように「～ヲ～デ囲う」は「ヲ格句の事物がデ格句の事物を伴った状態になる」という変化(総体変化)を表すが、より詳しく述べれば、「ヲ格句の事物(屋敷)がその周りにデ格句の事物(土塀)を伴った状態になる」という変化を表す。このような意味的特徴を持つ「～ヲ～デ囲う」を～ニ～ヲ形、すなわち位置変化にシフトしようとするとうどうなるだろうか。～ヲ～デ形のヲ格句とデ格句は、～ニ～デ形ではそれぞれニ格句(着点)とヲ格句(対象)になるから、「着点にあたる事物の外側に対象にあたる事物(土塀)が存在する」ことになってしまい、位置変化という出来事における通常に着点と対象の位置関係とは逆の位置関係を指定することになってしまう(位置変化では通常、「グラスに水を入れる」のように、着点にあたる事物(グラス)

⁴ (10b)について、自然ではないが非文とまでは言えないとする人もいるかもしれない。その場合は、「囲う」が総体変化を表すため、自体変化を表す「ふくらます」等に比べれば許容度が上がるということなのだろう。しかしいずれにしても「～ニ～ヲ囲う」が許容されにくいという事実は動かないといえる。また、許容されない(あるいはされにくい)理由が、本稿の以下の部分で述べる「囲う」の意味的特徴にあるという点も動かないと思われる。

⁵ 調査の詳細は次の通りである。『中納言』の短単位検索で語彙素読み「カコウ」・品詞「動詞」を条件として検索したところ、396例がヒットした。ここから、動詞「囲う」以外の用例(「描こう」、名詞の「囲い」等)や複合動詞の用例(「囲い込む」等)、①の意味の「囲う」以外の「囲う」の用例、受動文の用例を除いた上で、～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の用例を数えた。ニ格句やデ格句が現れていない場合でも、文脈から格体制が判別できるものについては集計に入れた。なお、本稿の本文では「囲う」のように表記しているが、調査にあたっては漢字・仮名の別なく調査している。

が外側、対象にあたる事物（水）が内側になる。少なくとも「着点にあたる事物が内側で対象にあたる事物が外側」という位置関係を強制する位置変化動詞は存在しないだろう）。そのため～ニ～ヲ形が成立せず、壁塗り代換が成立しないのだと考えられる。

ちなみに、壁塗り代換を起こす動詞について確認してみると、このような、～ニ～ヲ形（位置変化）へのシフトを阻害する意味的特徴を持つ動詞はみられない。たとえば「～ヲ～デ塗る（壁をペンキで塗る）」は「ヲ格句の事物（壁）がその表面にデ格句の事物（ペンキ）を伴った状態になる」という総体変化を表すが、これを～ニ～ヲ形にシフトさせると「ニ格句（壁）の表面にヲ格句（ペンキ）が存在するようになる」という、位置変化における通常の着点と対象の関係が得られる。また「～ヲ～デ満たす（グラスを水で満たす）」は「ヲ格句の事物（グラス）がその内側にデ格句の事物（水）を伴った状態になる」という総体変化を表すが、これを～ニ～ヲ形にシフトさせると「ニ格句の事物（グラス）の内側にヲ格句の事物（水）が存在するようになる」となり、やはり位置変化における通常の着点と対象の関係となる。

(9) にまとめたように、川野（2009）では、壁塗り代換が、位置変化の下位類である依存的転位と状態変化の下位類である総体変化の間の意味タイプのシフトによって起こると論じた。「囲う」が壁塗り代換を起こさないのは、このシフトを妨げる意味的特徴を有しているためだと考えられる。つまり、「囲う」が壁塗り代換を起こさないことは、(9) の枠組みの中で捉えることができるのである。

4. 「囲う」はなぜ餅くるみ交替を起こさないのか

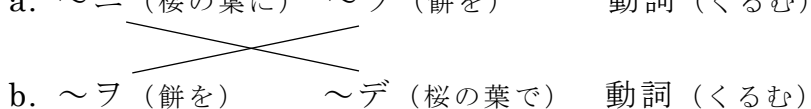
ここまで壁塗り代換について見てきたが、冒頭でも述べたように、～ニ～ヲ形（位置変化）と～ヲ～デ形（状態変化）の交替には、壁塗り代換の他に、「餅くるみ交替」が存在する（川野 2006、2009 等）。そこで本節では、餅くるみ交替と「囲う」の関係について検討したい。

まず、壁塗り代換と餅くるみ交替の違いを確認しておきたい。

(11) 壁塗り代換 (= (3))

a.	～ニ（壁に）	～ヲ（ペンキを）	動詞（塗る）
b.	～ヲ（壁を）	～デ（ペンキで）	動詞（塗る）

(12) 餅くるみ交替

- a. ~ニ (桜の葉に) ~ヲ (餅を) 動詞 (くるむ)
b. ~ヲ (餅を) ~デ (桜の葉で) 動詞 (くるむ)
- 

どちらも~ニ~ヲ形 (位置変化) と~ヲ~デ形 (状態変化) の交替であるが、交替の際の格成分の対応の仕方が異なっている。すなわち、壁塗り代換では、~ニ~ヲ形のニ格句とヲ格句が、~ヲ~デ形のヲ格句とデ格句にそれぞれ対応するのに対し、餅くるみ交替では、~ニ~ヲ形のニ格句とヲ格句が、~ヲ~デ形のデ格句とヲ格句にそれぞれ対応する。また、「塗る」は壁塗り代換を起こし「くるむ」は餅くるみ交替を起こすというように、どちらのパターンで交替が起こるかは動詞によって異なる。なお、~ニ~ヲ形が位置変化の中でも依存的転位を表し、~ヲ~デ形が状態変化の中でも総体変化を表すという点は、壁塗り代換を起こす動詞も餅くるみ交替を起こす動詞も同じである (たとえば「~ニ~ヲくるむ」は、ニ格句の事物 (桜の葉) をヲ格句の事物 (餅) の形状に適応させつつヲ格句の事物をニ格句の事物の中に位置づけるという動作を表す (依存的転位)。また「~ヲ~デくるむ」はヲ格句の事物 (餅) の属性変化ではなく、デ格句の事物 (桜の葉) を伴った状態になることを表す (総体変化))。

3 節では「囲う」が総体変化を表すにもかかわらず壁塗り代換を起こさないことを見たが、実は「囲う」は餅くるみ交替も起こさない。

- (13) a. 屋敷を土塀で囲う (～ヲ～デ形)
b. *土塀に屋敷を囲う (～ニ～ヲ形)

(13) が示すように、~ヲ~デ形の (13a) を餅くるみ交替のパターンで交替させた (13b) は不適格な文となり、交替が成立しないのである⁶。

それでは、「囲う」は総体変化を表すにもかかわらず、なぜ餅くるみ交替を成立させないのだろうか。

⁶ 3 節で述べたように、BCCWJ における「囲う」の用例調査では、~ヲ~デ形が 135 例あったのに対し~ニ~ヲ形と判断できる例は 0 であった。つまり (13b) のような用例は、今回の調査の範囲では見られなかった。

なお、中には (13b) のような例を非文とまでは言えないとする人がいるかもしれないが、その場合も、注 4 に述べたのと同じ理由で、本稿の議論の決定的な支障にはならないと考えられる。

3節では、「囲う」が壁塗り代換を起こさない理由について、「～ヲ～デ囲う」の表す「ヲ格句の事物（屋敷）がその周りにデ格句の事物（土塀）を伴った状態になる」という総体変化を、壁塗り代換の～ニ～ヲ形にシフトさせると、「着点にあたる事物（屋敷）の外側に対象にあたる事物（土塀）が存在する」という、位置変化における着点と対象の位置関係としては不自然な位置関係が強制されるためであると論じた。しかし餅くるみ交替の場合は、～ヲ～デ形のヲ格句が～ニ～ヲ形のヲ格句に対応し、～ヲ～デ形のデ格句が～ニ～ヲ形のニ格句に対応するため、～ニ～ヲ形にシフトさせると「着点にあたる事物（土塀）の内側に対象にあたる事物（屋敷）が存在するようになる」という自然な位置関係が得られる。つまり「～ヲ～デ囲う」が持つ「ヲ格句の事物（屋敷）がその周りにデ格句の事物（土塀）を伴った状態になる」という意味的特徴は、餅くるみ交替の成立を妨げる要因にはならないのである。実際、餅くるみ交替を起こす「くるむ」も、「囲う」と同様、～ヲ～デ形において「ヲ格句の事物（餅）がその周りにデ格句の事物（桜の葉）を伴った状態になる」という内容の総体変化を表す。

よって「囲う」が餅くるみ交替を起こさない理由は別にあることになるが、それは、「～ヲ～デ囲う」が「デ格句の事物がヲ格句の事物の方に動かされる」という動きの方向を強く指向する点であると考えられる。「AをBで囲う」といった場合、Aは固定したままBの方を動かして「囲う」動作を行うと考えるのが一般的だろう。「屋敷を土塀で囲う」のようにヲ格句の事物（屋敷）が動かしづらいものである場合はもちろんのこと、「鳥かごを段ボールで囲う」のようにヲ格句の事物（鳥かご）が動かせる物の場合でも、ヲ格句の事物は固定したままでデ格句の事物（段ボール）の方を動かすという動作をイメージするのが通常だと思われる。つまり「～ヲ～デ囲う」は、その語彙的意味において、「デ格句の事物→ヲ格句の事物」という動きの方向を強く指向すると考えられるのである。そしてこれを餅くるみ交替の～ニ～ヲ形にシフトさせると、「着点にあたる事物（ニ格句の事物）が対象にあたる事物（ヲ格句の事物）の方に移動する」という、位置変化における通常の移動の方向とは逆の方向を指向してしまうことになるため、餅くるみ交替が成立しないのだと考えられる（位置変化では通常、対象にあたる事物が着点にあたる事物の方に移動する。少なくとも「着点にあたる事物が対象にあたる事物の方に移動する」ということを強制する位置変化動詞は存在しないだろう）。

ちなみに、餅くるみ交替を起こす「くるむ」について確認してみると、このような～ニ～ヲ形へのシフトを妨げる意味的特徴はみられな

い。「餅を桜の葉でくるむ」と言った場合、餅を桜の葉の方に持っていつてくるんでもよく、桜の葉を餅の方に近づけてくるんでもよい。つまり「～ヲ～デくるむ」はヲ格句とデ格句の事物間の動きの方向に関して無指定であり、そのため～ニ～ヲ形へのシフトが阻害されることがないのだといえる。

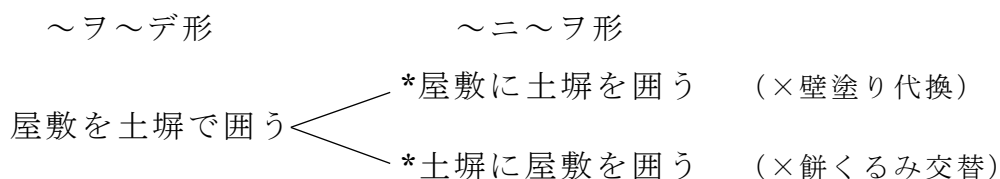
5. 「囲う」と「巻く」の比較

最後にこの5節では、「囲う」と「巻く」を比較したい。先に引用した『明鏡国語辞典』の「囲う」の意味の説明に「内と外を区別する仕切りを設けて、周囲を取り巻く」とあり、「巻く」という動詞が使われていることにも見られるように、「囲う」と「巻く」の表す意味には似た部分がある。しかし、「囲う」が壁塗り代換も餅くるみ交替も起こさないのに対し、「巻く」はどちらの交替も成立させる（川野 2011）。

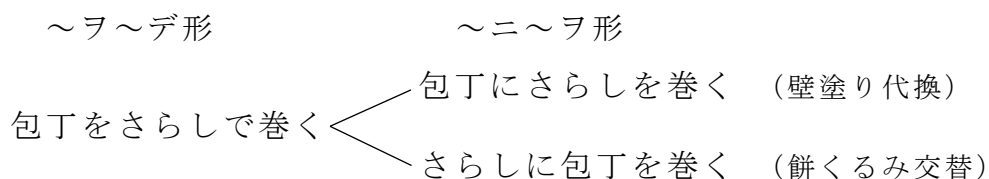
- (14) a. 包丁にさらしを巻く
 b. 包丁をさらしで巻く (壁塗り代換)
- (15) a. さらしに包丁を巻く
 b. 包丁をさらしで巻く (餅くるみ交替)

つまり、「囲う」と「巻く」は、似た意味を表すにもかかわらず、格体制の交替の可否に関して対照的なふるまいを見せるのである。以下では「囲う」に関する前節までの分析を踏まえつつ、なぜ「囲う」と「巻く」にこのような違いが生じるのかを考察する。

既に述べたように、「囲う」は～ヲ～デ形はとるが～ニ～ヲ形はとらない。



これに合わせる形で「巻く」のふるまいを整理すると次のようになる。



つまり「～ヲ～デ囲う」は壁塗り代換の～ニ～ヲ形にも餅くるみ交替の～ニ～ヲ形にも交替させられないのに対し、「～ヲ～デ巻く」はどちらの～ニ～ヲ形にも交替が可能だということである。なぜこのような違いが生じるのだろうか。

3 節では「囲う」が壁塗り代換を起こさない理由について、「～ヲ～デ囲う」の表す総体変化が「ヲ格句の事物（屋敷）がその周りにデ格句の事物（土塀）を伴った状態になる」というものであり、そこに含まれる「ヲ格句の事物（内側）—デ格句の事物（外側）」という意味的特徴が妨げとなって、壁塗り代換型の～ニ～ヲ形への交替が不成立になるということを述べた（なお、この意味的特徴は餅くるみ交替を妨げる要因にはならない（4 節を参照のこと））。これに対し「～ヲ～デ巻く」の表す総体変化は二通りの解釈が可能であり、「ヲ格句の事物（包丁）がその周りにデ格句の事物（さらし）を伴った状態になる」という出来事として見ることも、「ヲ格句の事物（包丁）がその表面にデ格句の事物（さらし）を伴った状態になる」という出来事として見ることもできる。前者の場合は「ニ格句の事物（さらし）の内側にヲ格句の事物（包丁）が存在するようになる」という位置変化にシフトして餅くるみ交替が成立し、後者の場合は「ニ格句（包丁）の事物の表面にヲ格句の事物（さらし）が存在するようになる」という位置変化にシフトして壁塗り代換が成立することになるのである⁷。

「～ヲ～デ囲う」も「～ヲ～デ巻く」も似たような動作を表すが、決定的な違いは、「囲う」ではヲ格句とデ格句の二つの事物間に空きがあるのに対して「巻く」では二つの事物が密着するという点だろう。この違いが、「～ヲ～デ巻く」でのみ、「ヲ格句の事物がその表面にデ格句の事物を伴った状態になる」という解釈を生じ、これにより「巻く」においてのみ、壁塗り代換が成立するのだと考えられる。

また、4 節では「囲う」が餅くるみ交替をおこさない理由について、「～ヲ～デ囲う」が「デ格句の事物をヲ格句の事物の方に動かして囲う動作を行う（デ格句の事物→ヲ格句の事物）」という動きの方向を強く指向するために餅くるみ交替型の～ニ～ヲ形への交替が不成立にな

⁷ 「包丁をさらしで巻く」を「さらしの内側に包丁がある」という出来事として見る場合は、「餅を桜の葉でくるむ」における「餅」と「桜の葉」の関係（桜の葉の内側に餅がある）と同じことになり、餅くるみ交替が起こる。一方「包丁をさらしで巻く」を「包丁の表面上にさらしがある」という出来事として見る場合は、「壁をペンキで塗る」における「壁」と「ペンキ」の関係（壁の表面上にペンキがある）と同じことになり、壁塗り代換が起こる。詳細は川野（2011）を参照。

るということを述べた。これに対し「～ヲ～デ巻く」には、このような意味的特徴がみられない。たとえば「包丁をさらしで巻く」と言った場合、広げたさらしの上に包丁を載せて巻く動作を行ってもよいし（包丁→さらし）、包丁の方にさらしを持って行って巻く動作を行ってもよい（さらし→包丁）。つまり先に 4 節でみた「くるむ」の場合と同様、「～ヲ～デ巻く」は二つの事物間の動きの方向に関して無指定なのであり、したがって～ニ～ヲ形への交替が妨げられないのである。似たような動作を表す「～ヲ～デ囲う」と「～ヲ～デ巻く」であるが、「デ格句の事物→ヲ格句の事物」という動きの方向を語彙的に指向するか否かが異なっており、これが決定的な要因となって餅くるみ交替の成否が分かれるのだと考えられる。

以上のように、川野（2009）、及び、本稿の 3 節、4 節の議論を踏まえると、「囲う」と似た動作を表す「巻く」が、なぜ壁塗り代換も餅くるみ交替も成立させるのかが説明できる。

6. まとめ

「～ヲ～デ囲う」が総体変化を表すにもかかわらず壁塗り代換も餅くるみ交替も起こさないのは、「囲う」の持つ、(i)「[ヲ格句の事物（内側）—デ格句の事物（外側）]という位置関係を指定する」という意味的特徴と、(ii)「[デ格句の事物→ヲ格句の事物]という動きの方向を強く指向する」という意味的特徴が、総体変化から位置変化へのシフトを妨げるためだと考えられる（より厳密に述べれば、(i)の意味的特徴は壁塗り代換型のシフトを妨げ、(ii)の意味的特徴は餅くるみ交替型のシフトを妨げる）。つまり、「囲う」が交替を起こさないことは、「～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の交替は、「依存的転位（位置変化の下位類）として解釈される出来事が、見方を変えると総体変化（状態変化の下位類）としても解釈でき、かつその逆も成り立つ」という意味タイプのシフトによって起こる」とした川野（2009）の記述から説明できるといえる。本稿では、一見、反例のようにもみえる「囲う」についても、川野（2009）の枠組みの中で説明が可能であることをみた。

参考文献

- 奥田靖雄（1976）「言語の単位としての連語」教育科学研究会国語部会（編）『教育国語』45， 麥書房
- 奥津敬一郎（1981）「移動変化動詞文—いわゆる spray paint hypallage について—」『国語学』127， 国語学会

- 川野靖子（2004）「「桜の葉に餅をくるむ」と「餅を桜の葉でくるむ」—壁塗り代換との関連性—」『香椎潟』50, 福岡女子大学国文学会
- 川野靖子（2006）「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象—格成分の対応の仕方—」『日本語の研究』2-1, 日本語学会
- 川野靖子（2009）「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞—交替の可否を決定する意味階層の存在—」『日本語の研究』5-4, 日本語学会
- 川野靖子（2011）「壁塗り代換と餅くるみ交替の両方が可能な動詞—「巻く」と「埋める」の分析—」『文藝と思想』75, 福岡女子大学文学部紀要
- 川野靖子（2013）「現代日本語の動詞「詰める」「覆う」の分析—格体制の交替の観点から—」『埼玉大学紀要（教養学部）』48-2.
- 川野靖子（2016a）「壁塗り代換は、なぜヴォイスのカテゴリーに入らないのか」『埼玉大学紀要（教養学部）』51-2.
- 川野靖子（2016b）「壁塗り代換は体系的な文法現象である—山田昌裕（2004）「壁塗り代換（spray paint hypallage）—文法現象の存在をめぐって—」への反論として—」『小出慶一教授退職記念論文集，ことばの本質を求めて（埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊1）』
- 北原保雄（編）（2002）『明鏡国語辞典』初版，大修館書店

付記

本稿は、科学研究費補助金（基盤 C、課題番号 26370527）による研究成果の一部である。

（埼玉大学人文社会科学部准教授）